

上野動物園の真実

The truth of Ueno zoological
garden

越智 達之
徳永 美理
加瀬 健吾
元 進之介

序章

近年、東京都恩賜上野動物園¹の入園者数減少、人気低迷がマスメディアによって、報道されている。実際に上野動物園の年間入園者数は最多記録である1974年の約764万人に比べると2008年には約474万人減少し、約290万人で減少傾向にある²。

本稿では、この数値で見た現状を踏まえた上で論を進める。以下、第一章では動物園の起源と本来のあるべき姿について概観し、第二章では上野動物園におけるケースを基に我々がメディアから受け取る情報とその実情との違いについて述べる。第三章では、現在上野動物園で行われている取り組みについて言及し、第四章で本稿をまとめ、新しい提案をする。

なお、本稿では主要参考文献、最新の統計データ並びに上野動物園園長小宮輝之氏へのインタビュー(2009年9月10日13時～14時)など第一次資料に依拠し、今後の上野動物園のあり方について考察を進める。

第一章 動物園の起源

第一節 西欧のケース

動物園の歴史は西欧から始まる。その起源は、9世紀頃の西欧各国の宮廷に付属して設営されたものに求められる。フランク王国のカール大帝と息子のルイ敬虔王や神聖ローマ帝国の皇帝がつくった宮殿付属動物園は、二つの大きな役割をもつものであった。一つは、動物の交換・寄贈を通じて他国との政治的修好関係を結び、植民地原産の珍獣などを収集することによりその国への支配力を示す政治的な役割である。もう一つは、各国から収集してきた動物に対して珍奇というだけでなく、それがもつ価値を明確にするため、価値の体系化をはかる動物学などの学問の研究・発達の場合、つまり研究施設としての役割であ

る。

もちろんこれらの動物園を見ることができるのは王侯貴族の一部の人間のみであり、一般市民に対するものではなかった。ところが中世後期以降、都市機能の確立の中において動物園もその意味や機能を変え、一般市民にも開放されていくことになる。一般公開された動物園として最も古いものはフランス革命のあとに公開されたパリ動物園である。しかし、この動物園は珍獣等を来園者に見せて楽しませる娯楽施設の要素が大きく、教育・研究としての役割はほとんどなかった。

そこで 1828 年、ロンドン動物学会の研究資料収集施設として最初の科学的動物園であるロンドン動物園が創設された。ロンドン動物園は生きた動物を生きたまま収蔵する博物館としての意味合いが強く、一般公開する目的はその研究費用調達の方途としてであった。ちなみに、動物園は英語で zoological garden（動物学的庭園）というが、これを縮めて zoo と呼ぶこともロンドン動物園から始まった。

以後西欧における動物園は、動物学を基調としたものとして自然史博物館を構成する重要施設となり、動物園の運営や組織も、大学や博物館などの研究施設や附属機関としての道を歩んだ。そしてその流れは、西欧を中心として世界の動物園界の主流となって現在に至っている。

第二節 日本のケース

これに対して日本の動物園はどうなのか。これは似ているようで違う進み方であり、西欧の表面的模倣である。日本の動物園は、明治政府が行った西欧の列強諸国に追いつくための近代国家建設の過程で成立したものである。西欧文化の直輸入を推し進めた明治政府は、1882 年、日本初の動物園を博物館附属動物園（現在の東京都恩賜上野動物園）として開園させた。明治政府にとって動物園は産業振興や近代都市建設のための手段であり、文化施設的要素の意味合いが強かった。ここで動物園が動物学でなく、産業や商業と結びつく独自の端緒

が形成されたのである。

日本において動物園が動物学的な考えである西欧のものとはかけ離れた動物園として発展していった理由は二つある。

まず一つ目は、日本には娯楽施設が少なく、動物園が娯楽施設として機能したことである。二つ目は、日本に動物学の基盤がなかったことである。娯楽施設が乏しかった日本社会において、動物園は庶民の圧倒的な人気を博していた。動物園は珍獣や人気のある動物を展示・観覧する娯楽施設として、興行的に成立する産業として、巨大な行楽の場に成長し、日本のエンターテインメントの王者の座に長期間居座っていた。そのため生物学などの研究施設としての動物園の機能が果たされていなかったのが日本の動物園だったのである。

鷹橋(1986)によれば、上野動物園の場合、昭和 47 年 10 月に日本で初めてジャイアントパンダが来園し同年 11 月から公開されたが、同年に初めて入園者数が 500 万人を突破し、翌年には 700 万人を超えた。日本ではジャイアントパンダの人気は高く、上野動物園にはジャイアントパンダ目当ての来園客が押し寄せた。そのため、興行などで集客力のある人気者を指す客寄せパンダという言葉が生まれたほどであった³。

2008 年 4 月 30 日に、上野動物園唯一のジャイアントパンダのリンリンが死去し、それが原因で上野動物園の人気の低迷が進んだと言われている。このことは、日本人が動物園を「珍獣を見るためのテーマパーク」と見なし、上野動物園の発展は、その理解によるものだったということの表れである。

また、日本の動物学の誕生は 1877 年に東京帝国大学理学部生物学科が設立されたことによるものである。動物園開園当時、まだ生まれたばかりであった日本の動物学は、動物園と結びついて動物園の基礎となる道をたどらなかった。その中でも、1900 年に初めて正式な上野動物園園長の辞令を受けた東京帝国大学理科大学助教授の石川千代松は動物学者であり、コアユを多摩川上に放流してオオアユに育つことを証明した。しかし、彼も動物学を動物園に持ち込み発展させていくというよりは、オーストラリアやドイツから外国原産の動物を購入・交換し、上野動物園の発展に力を注いだ。これは 1907 年に動物園主任を命

ぜられた黒川義太郎についても同じであり、東南アジアや南米などの外国から動物を次々と購入・交換し、結果として娯楽施設としての動物園の発展に力を尽くした。

第三節 本章のまとめ

ここまで世界、そして日本の動物園の成立と歴史について述べてきたが、ここで日本人独自の動物観について少し考えてみたい。日本人は古代以来、自然と共生していく中で動物との共生を長い間行ってきた。それは西欧文化が流れ込んでくる明治以前まで続いたものであり、例え農作により自然に手を加えることがあっても、生態系を損なうことなく共生していた。この事実は現代の環境エンリッチメント⁴を考える上で有効なものであり、自然との調和を求められる現代において大変参考となるものである。

そこで本研究では、世界の動物園の主流である動物学などの研究施設という観点から、日本の動物園を、珍獣などを展示するだけの娯楽施設ではなく、特に日本の動物についての研究を行う動物学や生物学の研究施設にしていくことを提示していく。その実践の場を日本で最も歴史のある上野動物園として、同園長の小宮輝之氏とのインタビューを交え具体的内容を提案する。日本の動物を特に研究する動物園は今までになく、また日本人と動物との共生の内容については、環境問題に対する意識・関心が高まる昨今の流れに乗っているのだ。

第二章 メディアからの情報と実情との違い

第一節 メディアからの情報、行動展示

情報化社会の到来や生態学などの野生動物に関する研究の発達により、人々は動物園を時代遅れの娯楽施設と考えはじめ、また野生の姿に対して動物園での動物の姿に違和感・不自然さを感じるようになった。近年は行動展示を用い

て来園者数が急増した旭山動物園などの少数の動物園を除いて、多くの動物園では来園者数が減少傾向にある。全国の動物園⁵入園者数は下図 1 の通り 1990 年から約 3.1%減少している。

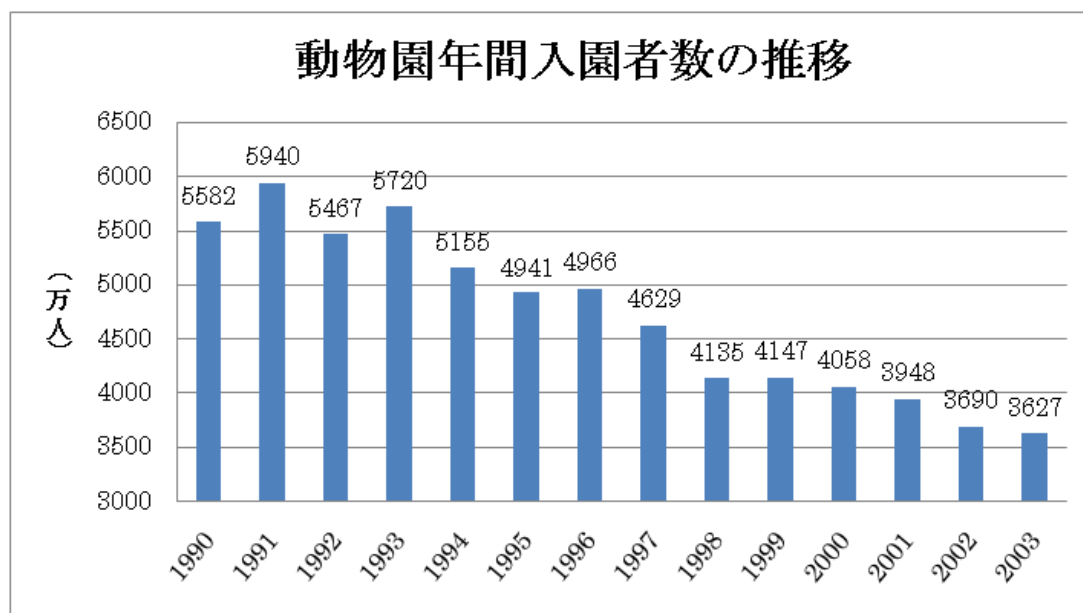


図 1 日本の動物園全体の年間入園者数の推移

出所：横浜市立動物園のあり方懇談会報告書より

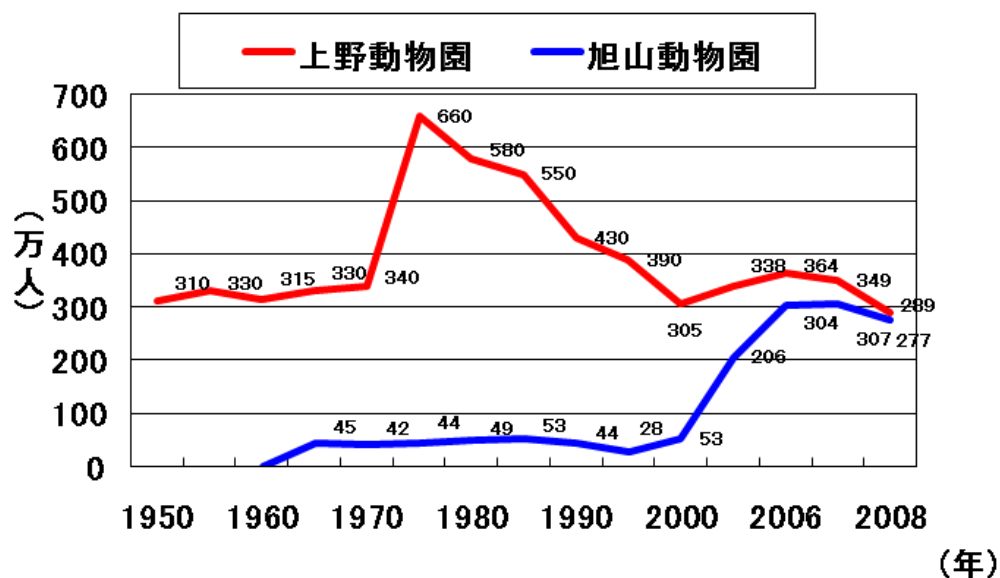


図 2 上野動物園と旭山動物園の来園者数推移

出所：旭山動物園ホームページ、東京都ホームページより作成

全体的にこうした減少傾向が見られる中、未だに日本一の来園者数を誇っている上野動物園に関しても、図 2 を見る限り、それは例外ではない。また、最近メディアでも大きく取り上げられ、上野動物園としばしば比較されている動物園の一つに旭川市旭山動物園⁶がある。旭山動物園に関しては、図 2 を見ると、入園者数は増加傾向にある。旭山動物園は 1997 年から「行動展示」を実現すべく取り組みを始めた⁷。2000 年以降、マスコミに大きく取り上げられるようになり、知名度も上がった。マスコミによる報道が、入園者数の増加の一因となっているということは想像に難くない。そもそも、「行動展示」とは、この言葉を初めて使った⁸とされる旭山動物園名誉園長の小菅氏によれば、「動物それぞれの“種”が持っている行動を引き出し、それを展示すること」とであるという。そこで、「行動展示」のような動物本来の行動を引き出すような展示方法が旭山動物園独自のものなのか調べたところ、そのような事実は見られず、他の動物園でも行われており、その例には枚挙にいとまが無い。

ましてや、上野動物園においては、前述の「行動展示の定義」にのっとった展示方法として、旭山動物園において行動展示への取り組みが開始される 1 年前、1996 年に「ゴリラ・トラのすむ森」を完成させ、ここで生息地を再現し、動物本来の姿を引き出すことに成功、群れでの飼育に取り組んでいる。そこでは、泳ぎが得意なトラの生態を活かすための池があり、滝も流れている(図 3)。また、トラがその爪を木に刺し、縄張りを示すという野生のトラ本来の生態も観察できたという(図 4)。ゴリラについても、野生の環境に近づけるため、オス 1 頭とメス 3 頭が一緒に暮らしている。そうした環境の中で、人工授精でなく自然出産での繁殖を成功させている⁹。



図 3 水浴びをするトラ



図 4 トラがマーキングした木

出所：日本林材新聞(2008)「シリーズ【この一葉】」2008年3月20日

我々は、こうした行動展示が旭山動物園のように入園者数増加につながるのならば、入園者数が近年減少傾向にある上野動物園でも展示方法の改善、行動展示のPRなどを行えば良いのではないかと考え、上野動物園園長、小宮輝之氏¹⁰へのインタビューを行った。すると、あまりに予想外な回答が得られた。次節ではそのインタビューを基に論を進める。

第二節 上野動物園園長 小宮氏のインタビューから

本節では、上野動物園園長、小宮氏へのインタビュー(2009年9月10日13時～14時)を基に、メディアで伝えられている情報と実情との差異を明確にする。

第一項 入園者数減少と過密

小宮氏に、上野動物園の入園者が減少傾向にあることについて訊ねると、「減っているのではなく、意図的に減らしている」との返答が来た。聞けば、以下の表1のように、1940年代から、上野動物園では「過度な人気」から来る「過密」への対策として、新施設の設立による入園者の分散を行ってきたのだという。つ

まり、上野動物園の入園者減少は、意図して起こされたものなのである。

表 1 新施設設立による来園者増への対策

年	設立施設	目的
1942年	井の頭自然文化園	30年代の動物園人気による入園者増への緩和
1958年	多摩動物公園	翌年完成のアフリカ生態園による入園者過密緩和
1989年	葛西臨海水族園	パンダブームによる入園者増への緩和

出所：小宮氏へのインタビューでの回答より作成

小宮氏の『入園者数を考える』（2005）によれば、パンダ人気が過熱していたころ、「パンダのおしりをチラッと見ただけでした」、「前の人の頭を見ている内にパンダの前を通過し、実物は見られなかった」などという声もあったという。パンダが来園したのは昭和 47 年（1972 年）7 月で、11 月からの公開だったにもかかわらず、この年初めて入園者数が 500 万人を超え、以来昭和 63 年（1988 年）まで毎年 600 万人以上の入園者を迎えたのだという。こうした人気の裏で、「本当に満足してもらえたのか」という疑問も消えなかったということだ。

小宮氏は、「年間入園者数が 300 万人台に減ったとはいえ、上野動物園は世界一過密な動物園だ」と言う。下表 2 で示された 2004 年のデータから、そのことが裏付けられている。上野動物園の入園者数は、アメリカのワシントン国立動物園¹¹と比べて約 4.3 倍、ブロンクス動物園¹²と比べると実に 15 倍以上にもなる。上野動物園の過密レベルの異常さがうかがえるデータだが、パンダブームの時代には、さらに過密は酷かったのだろう。こうした過密さから入園者を解放するため、昭和 57 年（1982 年）には上野動物園内の水族館の移転を決定している。表向きは 100 周年記念事業ということであったが、実は過密対策、入園者分散の意図があって完成させたのが葛西臨海水族園だということである。実際に 1989 年の上野動物園の入場者数は、下図 5 の通り前年より約 150 万人減少したが、葛西臨海水族園の入園者数を合計すれば、約 700 万人を超えているのだ。

表 2 主要動物園の入園者密度

主要動物園の入園者密度(2004)				
国名	動物園名	入園者数	面積(ha)	人/365日(ha)
アメリカ	ワシントン	3,500,000	65.5	146
アメリカ	サンディエゴ	3,314,475	40	227
中国	ホンコン	3,000,000	87	94
ドイツ	ベルリン	2,540,245	35	199
中国	上海	2,367,200	70	93
アメリカ	ブロンクス(ニューヨーク)	2,200,000	148	41
シンガポール	シンガポール	2,000,000	68	81
イギリス	ロンドン	994,500	15	182
日本	上野	3,202,775	14.1	622 ← 721
日本	多摩	941,565	52.3	49
日本	井の頭	535,128	11.5	127
日本	上野(1974)	7,647,440	14.1	1485
日本	旭山(2005/半年間)	1,225,931	14.8	455

出所：上野動物園園長小宮氏から頂いた資料より作成

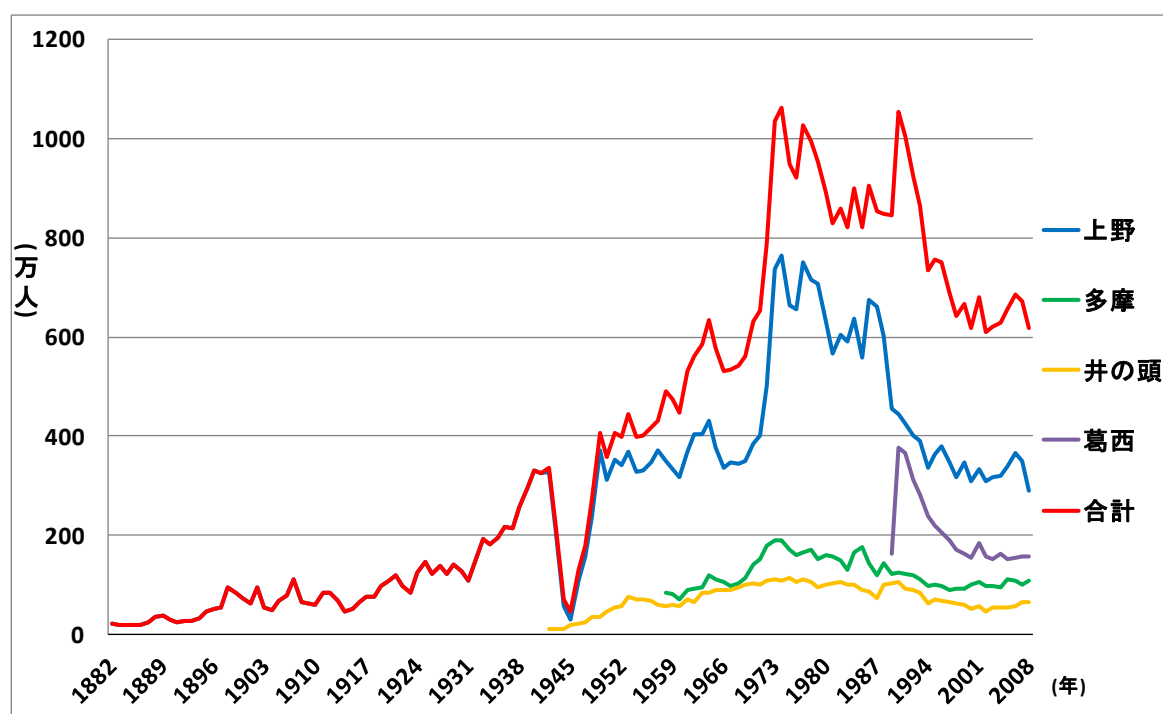


図 5 都立動物園の入園者数の推移

出所：上野動物園園長小宮氏から頂いた資料より作成

小宮氏によると、必ずしも入園者数が多ければ多いほど良い動物園であると言う訳ではないというのだ。動物園で落ち着いて動物の生態見学をするのにも適正人数と言うものがある。上野動物園の最も入園者数が多かった時期の様に、年間 700 万人を越す動物園では決して落ち着いて動物の生態見学はできないので、メディアで言われている深刻な入場者数の減少は起こっていないというのが現実のようだ。小宮氏の話のように、上野動物園は過密対策として入園者数を減らしているという意図を「表向き」にしていなかったため、我々が受け取る情報は表面的な「入園者減少」という情報のみになってしまうのであろう。

近年入園者数が急増している旭山動物園も上野動物園のように入園者数の過密が問題になってきているという。入園者数が増加したことにより、開園時間前から長蛇の列が出来ているほどだ。「以前よりも動物が見えにくくなった。落ち着いて見る事が出来ない。5～6 年前ならゴールデンウィークでも開園 30 分前なら無料駐車場に入れたのに今では開園 1 時間前でも困難だ。」など、旭山市民からの不満も出てきているようだ。

このように園内の過密問題は、本来あるべき動物園での落ち着いた動物の観察の妨げになり、結果として動物園側の対応できる範囲が限られてきて入園者の効用も低下させてしまうということに繋がることもあるのだ。

第二項 入園者数減少と経営

前項で確認したとおり、上野動物園の入園者数は確かに減少しており、それは意図的なものであった。我々は「ピーク時の入園者数の半分の入園者数になっているが、果たして経営は成り立つのか」という疑問を抱き、小宮氏に質問してみると、「経営が苦しくなるということは無い」とのことであった。上野動物園は東京都から毎年十分な予算を与えられているので経営面での不都合はないらしい。

現在、上野動物園の管理・運営は財団法人東京動物園協会^{1 3}が行っている。

東京動物園協会は、平成 18 年 4 月から都立動物園 4 園である、上野動物園・多摩動物公園・葛西臨海水族園・井の頭自然文化園の事業運営を「指定管理者」として飼育業務を含め全面的に担っている。

東京動物園協会の支出データは下表 3 の通りである。

表 3：収支予算書総括表(平成 21 年 4 月 1 日から平成 22 年 3 月 31 日まで)

(単位:円)	
事業活動収入	8,195,081,000
事業活動支出	8,103,877,000
収支差額	91,204,000

出所：財団法人東京動物園協会ホームページより作成

表 3 の通り上野動物園単体の経営の状況だけではなく、この 4 園の全体で見ても経営面での運営に困難があるということはないのである。なので、上野動物園の入園料¹⁴は適正価格であり、料金設定には問題はない。

また、上野動物園は都からの収入の他に「サポーター制度」で収入を得ている。「サポーター制度」とは、全国の公立動物園で個人や企業から寄付を募り、動物の餌代や施設改修費などに充てるものとして普及している制度である。

上野動物園は 2004 年度から、多摩動物公園とともにサポーター制度を導入した。寄付は餌代のほか、野生本来の行動を引き出す遊具設置などにも充てており、飼育環境を充実させるために使用されている。サポーター制度の決算報告書は下表 4 の通りである。

表 4：上野動物園サポーター制度 平成 20 年度決算報告書

1 収入の部		
個人	336名	4,095,000
中学生以下	121名	160,000
子供サポーター	20件	19,000
法人	13法人	1,100,000
当期収入合計		5,374,000
前期繰越金		2,378,462
収入合計		7,752,462 ①
2 支出の部		
動物施設等		4,279,096
子ども動物園補修整備	2,448,316	
ライチョウ飼育施設整備	1,571,430	
ウォータードラゴン飼育槽購入	259,350	
ゾウプレゼント・サトウキビ		123,000
サポーターズデイ開催経費(開場使用料他)		277,550
事務費		221,265
支出合計		4,900,811 ②
3 次期繰越金	①－②	2,851,651

出所：上野動物園ホームページより作成

サポーター制度による上野動物園のおもな支援動物には、アジアゾウ、キリン、ペンギン類、スマトラトラ、サル類、ライオン、ゴリラ、クマ類、カバ、オカピ、レッサーパンダ、カリフォルニアアシカ、クロサイ、ハートマンヤマシマウマ、アイアイなどが挙げられる。

上野動物園ではこのほか、民間資金で園内のサインや看板も整備している。動物解説ボードを使った企業広告で、都の指定管理を受ける東京動物園協会が広告代理店に業務を委託。看板は園内に十カ所あり、来園者の通行量に応じて金額を設定。年間約 160 万円からで、最も高いのは昨年 4 月末に死去したジャイアントパンダ舎前の約 290 万円で、大手出版社が出している。この事業では

年間 2000 万円前後の収入がある¹⁵。

このように恵まれた財政状況にあるならば、最近テレビなどで人気の経営難のピンチから脱した旭山動物園の行動展示を超える費用のかかった行動展示などを行えるのではないかと思い、小宮氏に訊ねたところ、「実際、旭山動物園のような行動展示の施設を作ることは財政的に可能である。」との返答がきた。

では、なぜ全ての動物に行動展示を行わないのかと尋ねると、「上野動物園は他に力を入れている、また力を入れるべきであることがあり、そちらに費用をまわしている。」との回答であった。しかし、展示自体に力を抜いている訳ではなく、動物の生態観察が可能な施設の維持、新たな建設も行われている。

上野動物園の取り組みについて、次章で詳しくまとめることとする。

第三章 上野動物園の取り組み

第一節 種の保存

上野動物園を含む都立動物園・水族館では、「ズー2001 構想・ズーストック計画」（動物保管計画）なるものを実施し、こちらに多くのお金をかけているのだという。「ズー2001 構想・ズーストック計画」とは、東京都が推進する「種の保存」と「環境学習」を2本の柱として、前章で述べた「過密対策として入園者を分散させるため新規に設立した施設」を含めた5つの都立の動物園・水族館（上野動物園、多摩動物公園、井の頭自然文化園、大島公園動物園、葛西臨海水族園）を総合的に整備（管理施設の充実、飼育方法の改善等）していこうとする構想である。「ズーストック」という言葉には、動物園の動物たちを地球の貴重な財産として、積極的に増やし、育成するという意味が含まれている。従って、ズーストック計画とは、第一章で確認した動物園本来の目的である「種の保存」を達成するために、動物園で飼育展示している野生動物を計画的に増加させていくというものである。これが動物園本来の目的・あり方だとすれば、上野動物園の進めている功績はとても大きなものであるとは言えないだろうか。実際、

上野動物園ではブーストック計画により、種の保存を目的とした園内整備を進めた結果、展示動物種数を減少させるという決断をとっている。

明治 15 年に日本で最初にできた上野動物園や、広い放飼場で動物の雄大な姿を観察できる多摩動物公園など、都立動物園はこれまでも日本の動物園をリードしてきた。これらに井の頭自然文化園、葛西臨海水族園を加えた 4 園では、動物の観察やふれあいを通じ、楽しみながら生物の多様性や自然保護の重要性について学ぶことができる。さらに、希少野生動物保護センターとしての機能、海外の動物園との動物の相互寄贈など国際交流の場としての機能もあわせ持っている。

上野動物園公式ホームページによれば、現在、上野動物園では 2011 年春のオープンに向けて、ホッキョクグマ舎とアシカ・アザラシ舎の展示施設の改修を進めている。絶滅危惧種であるホッキョクグマの飼育舎は、国際的な基準にもとづいて整備し、子育てのための空間を確保したり、土の放飼場を用意したり、ホッキョクグマが生き生きとくらせる施設である。また、プールを含む放飼場の面積を約 3 倍に拡張し、ホッキョクグマがゆったりと暮らす様子を、2 階の観覧スペースから見る事が出来る。北極海の環境を再現した 1 階部分では、ホッキョクグマが水中で見せるダイナミックな行動を間近に観察することが可能だという。アシカ、アザラシのプールは広くするだけでなく、深さにも変化をつけ、アシカとアザラシが自由にのびのびと行動できる環境を整え、アシカやアザラシの水中での動きも直接観察できるようになる。

第二節 原点回帰

国立動物園のない日本で、動物という「平和の大使」の受け入れをする、大切な使命を果たしてきた上野動物園であったが、そうした役割に加えて、21 世紀にふさわしい新たなテーマの取組みも始まっている。

その新しいテーマとは、「日本の文化を大事にし、伝えていく動物園」である。

「日本の文化」とは、江戸時代以前からの日本人が飼ってきた木曾馬や見島牛、

日本が世界に誇る土佐の尾長鳥など、実物の日本在来家畜や家禽たちを指しています。このように、上野動物園では、珍獣の展示だけでなく、「原点回帰」をキーワードに在来種の育成などの活動を開始し、国内動物園のリーダーとして、動物園本来の姿でアピールしているのだ。

2007年10月16日からトカラ馬が公開されている。トカラ馬とは、鹿児島県薩南諸島のトカラ列島に生息していた小型の在来馬である。薪の運搬をするなど家畜として飼育されてきたが、機械化で需要は減り、頭数が激減した。昭和28年に同県の天然記念物に指定され、現在は96頭が生存しているのみである。上野動物園が飼育に踏み切った背景には、「自らに在来馬飼育の芽を摘んできた」との反省があるそうだ。上野動物園は昭和28年から西洋馬の小型種、ポニーを積極的に飼育し、各地の動物園に寄贈してきた。その結果、在来馬の数が減少、全国の動物園で飼育されている馬約350頭のうち、約300頭がポニーで在来馬は24頭に過ぎない。

馬のほかに、2頭の日本在来牛も2009年に上野動物園にやってきた。山口県在来に見島牛と鹿児島県トカラ列島在来に口之島牛である。現在、和牛と呼ばれているのは明治時代に西洋の牛と交雑されており、日本の在来種は2種ともに100頭前後しか残っていないのだ。

小宮園長は、「日本でトカラ馬のような魅力ある生き物が滅びようとしていることに気づいてほしい」という。今後、ほかの動物でも日本固有の「在来家畜」の飼育を広げていく考えで、「原点回帰」を目指す。

「原点回帰」の一環として、2006年にクマの飼育場所である「クマたちの丘」が完成した。3種のクマのうち、エゾヒグマとニホンツキノワグマは日本固有種である。ホンドタヌキやハクビシンなども同じおりの中で飼育されており、日本の「里山」の風景が再現されている。小宮氏は「里山に住む生物を実際に見たことがある人は少ない。逆に希少性がある」と説明する。また、「クマたちの丘」では、全国でも初の試みとなるクマの冬眠姿を公開。この冬眠展示により、冬眠中のクマでも1日1時間程度は起きていることや、東京の外気温でも冬眠することがわかった。寝ている姿は決して派手ではないが、冬眠していた

18年度の12月～3月の入園者数は17年度の同期に比べ2割以上増えた。「一概にクマの冬眠だけが原因とはいえないが、寄与したのは確か」（管理課）と「原点回帰」の試みに手応えを感じている。

「原点回帰」という観点以外にも、「クマたちの丘」は2007年にエンリッチメント大賞¹⁶で最優秀賞を受賞し、環境エンリッチメントの面でも高評価を得ている。

さらに、動物園における野生生物保全の役割がますます重要視されている中、恩賜上野動物園では、小笠原諸島に生息し、絶滅の恐れがある国の天然記念物アカガシラカラスバトをはじめ、アイアイ、オカピ等、多くの希少動物の繁殖に取り組んでいる。

第三節 環境重視、共存型動物園への転換

小宮氏は上野動物園のもうひとつの新しいテーマに「地球の気候変動への対応」を挙げる。今、世界的に温度や湿度の変化に弱いカエルなどの両生類の絶滅が心配されている。日本では、高山に住むライチョウが、生息地の雪不足から天敵に襲われるなどの危機にある。上野動物園では、こうした気候変動に弱い動物たちを保全していく研究を開始した。例えば、上野動物園はライチョウの育成を行っている。昨年、日本初のスバルバルライチョウの人工孵化に成功した。その生態を調べることで、ライチョウの保護に貢献しているのである。

コンクリートの壁やアスファルトの地面は、夏の暑さと冬の寒さを増長する原因になっている。動物舎の屋根や観客通路の壁面を緑化し、反射熱を抑えるため、敷地内のアスファルトを全部取り払い、地面をウッドチップ舗装や遮熱舗装、土にする実験にも着手している。上野動物園は、できるだけエネルギーを使わずに動物たちにも来園者にも快適な動物園を目指している。また、小宮氏は「土敷きは動物の足にもやさしい。不忍池に馬場を作ってトカラ馬の乗馬コースにできれば」と意欲をみせている。

従来型の「見せる」動物園から、環境志向・共存型動物園への転換について、

「うちがやれば、全国の動物園への波及効果も期待できる」と小宮氏は言う。
このため、資金を提供してくれるサポーターを募っている（第二章第二節第二項でも言及した通り）。

表 5 上野動物園サポーター制度 一口当たり金額

	区分	1口当たり
個人サポーター	16歳以上	10000円
	中学生以下	1000円
法人		50000円

出所：上野動物園公式ホームページより作成

個人サポーターは、16歳以上が1口1万円、中学生以下は1000円、法人が5万円。特典として、同動物園が開催する「サポーターズデイ」への参加や直営売店や食堂の割引券などがある。

やきそばかおる¹⁷氏の話によれば、「遠くの国にいる動物に目を向けるのも大事だが、まずは身近にいる動物に目を向けることも大事で、地球環境を考える第一歩にもなる。上野動物園は他の動物園に比べて放飼場に緑が多く、今後の飼育環境改善活動に注目している」という。

第四節 ユニバーサルデザイン

動物への配慮だけでなく、ホッキョクグマ展示場脇の急勾配であった通路を変更・改修し、勾配をゆるやかにすることで、誰でも安全に利用できるように入園者にも配慮したバリアフリー化も行っている。また、このエリアには古くからの巨木があるが、伐採はせず、緑豊かな雰囲気をもそのまま残し、既存樹木の活用を行っている。こうした配慮のおかげで、上野動物園は動物にだけでなく来園者のことも考えた動物園として良い方向に向かえているのである。

第四章 結論、新しい提案

これまでの章で、動物園の誕生から日本の動物園がどのように成立し、そして現在までどのように歩んできたのか、マスメディアによる「報道しない」という形での偏向報道の存在、また上野動物園の「より動物園らしい取り組み」について、お分かりいただけたと思う。日本の動物園は動物学等の研究や種の保存に関わる施設ではなく、娯楽施設として始まった。そしてメディアの発達により新たな方向性への模索を始めた。それは世界の動物園の主流の流れを汲むものであり、世界の動物園の基準に合わせるために行動展示などの様々な努力を行って来た。それは今後の展望を含め大変意味あることであると我々は考える。

その一方でメディア、特にテレビや新聞等のマスメディアは情報化社会の流れに乗り発展していった。当然社会に対しての影響力も増していき、更に 1990 年代以降のインターネットの普及もあり人々の心理に大きな影響を及ぼす存在になった。

本来マスメディアは多くの人々に迅速かつ正確な情報を伝える性格を持つものであり、同時に高い公共性を要求されるものである。しかし、マスメディア迅速かつ正確な情報を伝えることだけではなく、次第に人々が注目するような情報の搾取や広告・宣伝方法などを展開していった。これは新聞社、テレビ局等のメディア媒体が各々の収入源を増やそうとして行ったことであるが、時にマスメディアの存在意義に反するような事態を招いてしまうこととなる。本来伝えるべき情報を刺激や話題性を強調した形で人々に伝えることが多くなってきたのである。他にも特にテレビ局では、人気を得るがために面白いが中身がないといった娯楽的情報を積極的に流すようなことが挙げられる。

このような中で情報を受ける人々は、常にたくさんの情報が入ってくる状況にあるため、一つ一つの情報を吟味する暇がなくなってしまうのが実状である。その結果、自分の元に入ってくる情報を全て鵜呑みにしてしまうステレオタイプに陥りやすい状態に常にあり、もはや正確な情報を正確に把握し理解することは現代では大変難しいこととなっている。

この現代の情報に対する悪循環は日本の動物園に対しても向かい風を吹かせることとなった。1980年代以降の上野動物園の入場者数の減少に対して、マスメディアは本来の理由であった事象には一切触れずに否定的な情報を人々に伝えた。日本の動物園が新たな歩みをみせているという事実は伝えずにただ入園者の減少を伝えた結果、人々は日本の動物園に対して「時代遅れの娯楽施設」、「日本の動物園に未来はない」といったような考えをもつようになってしまったのである。その後もマスメディアは動物園＝娯楽施設とした古い考えを一貫して続け、注目することは来園者数などの娯楽施設としての動物園の人気度にまつわることであった。日本の動物園がどのようなことを考え、そしてそのために何を行っているかということを情報にして発信することには消極的であった。旭山動物園を始めとした行動展示による園内活性化のことに關しても、あくまで娯楽施設としての動物園の成功例であるというような情報の伝達がなされていた印象である。これは物事の本質を見極めて情報を発信する本来のマスメディアの形とは異なったものである。

ではこの状況を打破するためには具体的にどのようなことをすべきなのであろうか。これから本論文の結論について述べる。

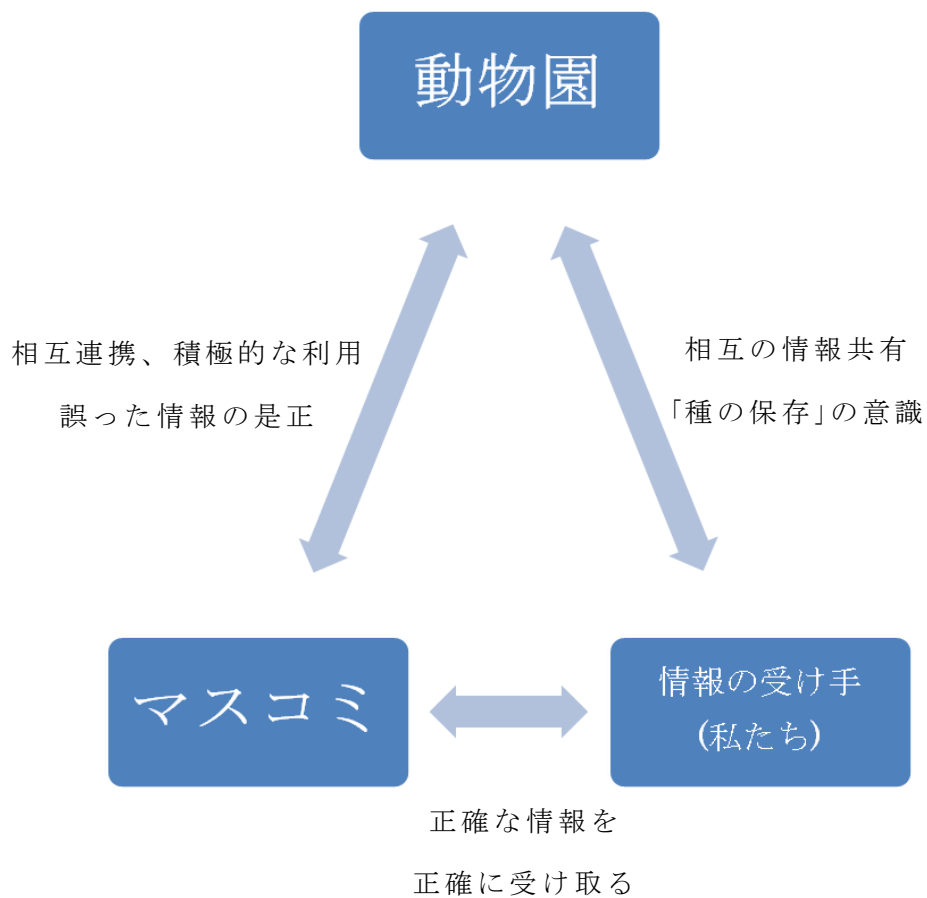


図 6 三者間の連携

出所：筆者作成

我々は提案として、上図に示したように、動物園・マスメディア・情報の受け手かつ入園者となる我々、三者の間の連携を重要視したいと思う。まず、マスメディアの今後すべきことであるが、これは本来のマスメディアの存在意義であり原点である多くの人々に迅速かつ正確な情報を伝えることを今一度実践してみることである。今世界の動物園がどのような存在であり、それを踏まえ日本の動物園が今どのような目的で何を行っているのか、ということをもっと世間に広めるべきなのである。ただ入園者数が減っていることを伝えるのではなく、その本当の理由を伝えるべきであり、世界の動物園と比べて今までの日本の動物園のあり方に問題があったことも伝えるべきである。

つぎに日本の動物園がすべきことであるが、これは動物園とマスメディアとの連携の必要性が挙げられる。日本の動物園は良いようにマスメディアに扱われて今まで来ている、といったら語弊が生じるかもしれないが、今後は動物園も積極的にマスメディアを活用して人々に真の動物園とはどういうものであるかを伝えていくべきである。動物園側からの積極的なアプローチをかけていくことも、今後の日本の動物園の展開に必要なことなのではないかと感じられる。

最後に挙げられるのは我々情報を受け取る側の意識の改善である。様々な情報が錯綜とする現代において、豊富かつ正しい知識を持つ、伝えられた情報が真実かどうかだけでなく、その情報の意味をしっかりと理解する、ということこれから考えなければならないのである。このことは以前から唱えられていたことではあるが、与えられた情報の客観性の有無や情報を形成するために用いられた更なる情報まで視野を拡げることによって、初めて情報を我が物にできるのである、ということを再認識しなければならない。

このようにして情報の元となる側、そしてそれを伝達する側、受け取る側の三方がそれぞれの存在意義を見つめ直し高い意識を持つことによって初めて、その中に流れる情報の価値は本物になるのである。それだけではない。このことにより、同じ情報の流れる関係の中でお互いに意識しあい、切磋琢磨していく環境を作ることが出来るのである。この体制を続けていけば、やがて社会全体の活性化にもつながっていき、更なる発展の道が切り開かれるのではないだろうか。

尚、本論文では動物園というカテゴリーに限って本文を進めてきた訳であるが、このように真実が隠されてしまっている情報というのは他にも身の回りに溢れているのが実状である。最後にインタビューを快く引き受けて下さった小宮園長に深く感謝の意をお伝えしたい。

¹ 以下、上野動物園。

²

³ 鷹橋信夫(1986)『昭和世相流行語辞典』旺文社

⁴ 飼育されている動物の暮らしを少しでも自然の中での暮らしに近づけるた

めの工夫。

⁵ 社団法人日本動物園協会加盟施設

⁶ 以下、旭山動物園。

⁷ 同年には巨大な鳥籠の中を鳥が飛び回る「ととりの村」が完成。翌年以降「もうじゅう館」「さる山」「ペンギン館」「オランウータン舎」「ほっきょくぐま館」「くもざる・かびばら館」と毎年のように新施設をオープンさせ、そのたびに入園者を増やしている。

⁸ 2001年6月30日東京動物園協会が一般を対象に主催した動物園セミナー「21世紀の動物園学」の中で、旭山動物園ホームページ「園長室」より抜粋。

⁹ 上野動物園コミュニティ誌(2009)『どうぶつのくに』

¹⁰ 以下、小宮氏と表記。

¹¹ アメリカ合衆国ワシントン州にある動物園。スミソニアン博物館で飼育されていた動物をもとに、1890年に開園した(創立は1889年)。2003年時点の飼育動物は435種2800点。

¹² アメリカ合衆国のニューヨーク市にある動物園。正式名称は野生生物保全公園 Wildlife Conservation Park。98年現在の飼育動物は564種3571点

¹³ 以下、東京動物園協会。

¹⁴ 一般600円。中学生200円。65歳以上300円。小学生以下、都内在住・在学の中学生は無料。

¹⁵ 中日新聞(2008)「『サポーター制度』全国に 公立動物園の財源確保策」
2008年5月17日

¹⁶ エンリッチメントに取り組む動物園や飼育担当者を応援すると同時に、来園者である市民がエンリッチメントを正しく理解・評価することにより、市民と動物園をつなぎ、市民の動物園に対する意識を高めることを目指して、2002年度より市民 zoo ネットワークが実施している。

¹⁷ 動物写真家で動物園評論家。

《参考文献・参考ホームページ》

・小宮輝之『うえの』上野のれん会 2005

・佐々木時雄『動物園の歴史：日本における動物園の成立』講談社 1987

・渡辺守雄ほか『動物園というメディア』青弓社 2000

・梶島孝雄『資料日本動物史』八咫書房 2002

・富山太佳夫ほか『つくられた自然』岩波書店 2003

・菅豊『動物と現代社会』吉川弘文館 2009

・中澤克昭『歴史の中の動物たち』吉川弘文館 2009

・小菅正夫『動物園の新たな試みと経営再建』第81回麻布獣医学会

・佐藤裕子／大原一興／藤岡泰寛『動物園における観覧時の感覚の利用実態に関する研究』日本建築学会大会学術講演概集 2007

・菊田融『動物園の社会教育施設としての可能性』社会教育研究 2008

-
- ・ 上野動物園コミュニティ誌『どうぶつのくに vol.1』 2009
 - ・ 上野動物園コミュニティ誌『どうぶつのくに vol.4』 2009
 - ・ 品田早苗 『学校教育における動物園・水族館の利用について、教員と動物園・水族館関係者が考える問題点と要望』 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集 2009
 - ・ 横島公司 『旭山動物園の奇跡』 札幌大学経済学部付属地域経済研究所、地域と経済、第3号
 - ・ 関田次男 『旭山動物園計画について学会賞を受賞して』
 - ・ 岡田麻美／北尾靖雅 『動物園における動物の展示配列に関する研究－空間構造の分析による動物の環境空間と配置構成－』 日本建築学会近畿支部研究報告集 2007
 - ・ 香川県 『人と自然が共生するかがわの環境づくり』

上野動物園ホームページ 最終閲覧日 2009.9.18

<http://www.tokyo-zoo.net/zoo/ueno/>

市民 zoo ネットワーク 最終閲覧日 2009.9.18

<http://www.zoo-net.org/>

《データ出典》

旭山動物園入園者数推移 最終閲覧日 2009.9.18

<http://www5.city.asahikawa.hokkaido.jp/asahiyamazoo/>

動物園入園者数推移表 最終閲覧日 2009.9.18

<http://www.city.yokohama.jp/me/kankyau/etc/shingikai/doubutsu/mokuji.html>

サポーター制度 20 年度決算報告書 最終閲覧日 2009.9.18

<http://www.tokyo-zoo.net/zoo/ueno/>

財団法人東京動物園協会 最終閲覧日 2009.9.18

<http://www.tokyo-zoo.net/outline/index.html>